

表2. 長期間(13日中7日以上)集落に不在だった理由

	漁村	農村
(雨季)		
沖の島で漁撈(漁撈キャンプに起居)	1	0
他村の知人のもとに長期滞在	2	1
合計	3	1
(乾季)		
畑で農耕(出作り小屋に起居)	0	7
沖の島で漁撈(漁撈キャンプに起居)	3	0
遠隔地で長期間泊まり込みの漁撈	4	0
他村の知人のもとに長期滞在	1	2
行商のため他村へ	0	1
合計	8	10

ような活動パターンは、近年になって重要性を増している。遠隔地へ出漁して希少な水産資源を採取することが、ヴェズの生活において大きな現金収入をもたらすようになっているからである。とくに、東南アジア向けの大型ナマコの採取は、ヴェズの経済生活を大きく変えた。このような事実を、先に見た「漁村では集落内で過ごす時間が多い」という結果と考え合わせると、次のように言える。漁村では、集落の生活を基本としながら、遠出を1年の活動の中によく取り入れ、メリハリのある暮らしを立てている。遠出を厭わない漁村の活動パターンが顕著になったのは、近年のことである。しかし、このことは、ヴェズが昔から持っていた「漁民性」を象徴的にあらわしていると私は考える。その理由は第

一に、土地に縛られた農耕民は遠出をしにくいからである。このことは、これまで述べた調査結果からもうかがえる。第二に、遠出の主な理由であるナマコ採取は、グローバル経済の浸透という社会経済的条件の変化への対処にほかならないからである。このようにオポチュニスト的な性格は、乾燥地の漁民に不可欠の条件だと最初に述べた。だが乾燥地にかぎらず、漁民がこのような性格を持つことは、人類史の上でかなり普遍的なものだったと私は思う。漁民は、農耕を捨てた時点で、必要な食糧を他者に依存するというリスクを多かれ少なかれ宿命づけられてきた。その代わり、生活戦略を調整することで社会経済的な変化に柔軟に対応し、危機を回避し続けてきたのである。

そのように考えれば、遠隔地での漁撈活動は、グローバル経済を背景に今後も活発に引き続けられるだろう。たとえナマコ資源が枯渇しても、その勢いは容易には衰えない。さまざまな危機に直面しつつも、海で生活する術を何とか切り開くのが漁民本来の姿だからである。

引用文献

- Nishimura, A. 1984. Fishing in Indonesia from the marine ethnological viewpoint with respect to Wallace's line. In (Gunda, B. ed.) *The Fishing Culture of the World*. Akadémiai kiadó, Budapest. pp. 677-703.
- Suda, K. 1994. Methods and problems in time allocation studies. *Anthropological Science* 102 (1):13-22.

ブタと一緒に飼われたヒツジ

菅 豊
北海道大学文学部

中国長江の南、浙江省嘉湖地方では、湖羊(英名:Hu Sheep)と呼ばれる品種のヒツジが飼育されている。嘉湖地方は、年平均気温約18度、熱暑時の最高気温は40度を超すこともあり、年間降水量は1200-1500ミリ、無霜期間は270日ほどと、高温多湿の自然環境にある。湖沼が多く分布し、それをつなぐように河川、クレークがめぐり、そこではイネ=コムギなどの二毛作を中心として、養魚、内水面漁撈、養蚕、小家畜飼育などが複合的に行われている。生業は高度に複雑な結合形態を持っており、その結果、土地利用が集約的になり、未利用荒

蕪地は5パーセントにも満たない。また、これらの生業は、生産物の売買を前提とした商業的性格を強く持っており、その性格は明代(14-17世紀)には、すでに確立されていたといわれる。

このようなモンスーン気候下の集約的農業の卓越地域において、「牧畜的家畜」の代表ともいえるヒツジが飼育されていることは、奇異の目をもって見られるかもしれない。確かに中国華南の家畜飼育は、ブタやスイギュウなどの大型有蹄類や、ニワトリ、アヒル、ガチョウなどの家禽類の飼育が主体である。もちろん農耕用のウシは存在するが、それは畜力の利用に力点がかけられ、肉利用、乳利用は副次的なものであった。あくまで「非牧畜的家畜」が、この地域の家畜の特徴といえる。

そういった中でヒツジ飼育は、農耕社会における家畜飼育の特質を体現しており、その理解のための重要な

指標となってくる。簡単にいうならば、この地域において本来「牧畜的家畜」であったヒツジが、「非牧畜的家畜」として飼育されているのであり、その家畜管理の論理には、この社会の論理が貫徹されていることが予想されるのである。湖羊は、通常ヒツジ飼養が行われる乾燥地帯とはかけ離れた環境で、長期にわたって特異的な方法で飼育されたことにより、一般的な牧畜地域で飼育されるヒツジとは、大きく異なった特異性を有するようになってきている。

湖羊の特異性は、まず第一に、完全舎飼いという飼育形態にある。湖羊は、終生ほとんど、あるいは一歩もヒツジ小屋（ブタと同じ家屋内で飼われている）から外に出ることはない。外に出るのは死んだ時か、売買、貸借、屠殺される時のいずれかである。それ以外の時は、できるだけ外に出さないよう積極的に閉じこめるのである。このような完全舎飼いは、通常のヒツジ牧畜観で考えるとかなり異様である。もちろん、冬場の厳寒期に限定的な個人舎飼いが行われる地域は、西アジアやヨーロッパにも存在するが、完全な舎飼いは伝統的ヒツジ飼育においてほとんど例を見ないであろう。湖羊を舎飼いすることは、当然、飼料を人間側が毎日欠かさず供給する、いわゆるフィーディングという飼育形態を前提としなければならない。このようなブタ同様の舎飼いの利点について人々は、1、余剰の土地が乏しいこの地方において利用空間が少なくせず、2、ヒツジ小屋には窓もなく、また各家ごとに隔離されているためハエやカの害虫や伝染性の病気を回避できる点、3、ヒツジの運動量を減らすことにより、餌の効率を高めることができる点、4、肥料用の糞尿を効率よく集められる点から説明する。

湖羊の特異性の第二点は、その利用にある。湖羊は、主として子ヒツジの皮革生産のために飼育されている。これとは対照的に、一般の牧畜社会で重要視される乳、羊毛は、ほとんど利用されない。湖羊の毛皮は商品価値が高いため“ルアンパオシ（軟宝石、柔らかい宝石）”とも称され、古くより珍重されてきた。フーヤンコウビ（湖羊羔皮）のブランドで知られる羊皮は、主として生後3日以内に屠殺した子ヒツジの皮であり、婦人服や帽子など服飾品の部分素材として用いられる。生後間もない屠殺とその皮の利用という観点からみれば、西アジアのパシュトゥン遊牧民などで飼育されているカラクール種のおス子ヒツジの利用と似ている。それは生後、ごく少数の種オス候補を除いてすぐに屠殺され、その皮はイスラム世界で珍重されるアストラカンの帽子の原料となり、高値で取り引きされる（松井, 1980: 53）。しかし、カラクール種の場合、あくまでオスを開引く群れ管理技術の一環として行われているのであって、そこで生産さ

れる子ヒツジの皮は副次的な生産物と見なした方がよい。一方、湖羊は群れの安定性など気にする必要は元々ないのであって、生後間もない屠殺は、それ自体主たる生産目的と結びついているのである。それは、何よりもオスに限らずメスも同様に屠殺することからも明らかである。ここには牧畜社会にみられるような、ハーディングと結びついたオス子ヒツジの選択的大量屠殺はなく、商品としての子ヒツジの皮を獲得するための、非選択的屠殺が存在するだけである。

湖羊の特異性の第三点は、早熟性、通年繁殖性、多胎性といった品種特性にある。そして、その品種特性は、商品としての子ヒツジを、とにかく多く生産するという商業的な目的に適合している点において特徴的である。湖羊は確かに、一般のヒツジに比べ早く性成熟する。内モンゴル自治区に分布するモンゴルの遊牧民などでは通常、ヤギやヒツジはゾサグと呼ばれる数え3歳の春に出産し、それより早く出産するものは子嫌い現象を招くため問題視されている（小長谷, 1996: 45-46）。一方、湖羊はオス・メスともに生後4~5カ月で性成熟し、6カ月齢あたりから実際に繁殖に供される。家畜は古くより早熟の方向へ改良が進められてきたため、一般に在来種より家畜の改良種の方が早熟性は高まるが、この点から湖羊の改良の度合いが推し量られよう。ただここで重要なのは、早熟という品種特性とともに、その早熟性をネガティブなこととせず、むしろ早く子供を得ることができる利点と見なしていることである。

群れ飼育や、子ヒツジの長期育成を考えると、早熟性は問題になるかもしれない。だが、舎飼いで、かつ僅かな種オス・成メス候補以外の子ヒツジ育成をほとんど行わない湖羊飼育にあっては、いっそう問題視されない。それどころか、商品として利益を生む子ヒツジを短いサイクルで確保してくれる有利な特質となっているのである。湖羊飼育者が高収益を上げるための戦略に、早熟性という品種特性はまさに合致しているのである。

ただし、商品としての子ヒツジを回転よく生産するためには、この早熟性のみでは不十分である。これに、通年繁殖性という特性が加わって、それが初めて可能になる。一般のメスヒツジは通常、短日間に春機発動がおこる季節繁殖を行う。つまり、日照時間の消長がメスの発情期の出現とその長さに影響を与えるのであって、基本的に日が短くなった秋日から初冬にかけてしか、ヒツジのメスは発情しない。熱帯や低緯度地帯において、周年繁殖は確認されている（Hafez, 1970: 245）が、中緯度地域では通年で繁殖する品種はほとんどない。しかし、湖羊のメスは妊娠さえしなければ、一年中約17日周期で発情する。この通年繁殖性によって、時には1年に2

表1. 伝統的ヒツジ飼育における多胎率

対象	多胎率	出典
アフリカ諸牧畜民	14%	(Dahl & Hjort, 1976: 91)
中国/内モンゴル自治区	13%	(小長谷, 1996: 45)
中国/浙江省興興県	82.65%*	(蔣・何, 1985: 16)
*二胎: 61.95%、三胎: 17.61%、四胎: 3.03%、五胎: 0.06%		

回、2年に3回という連産が可能となっている。

さて、品種特性として、残る一つが多胎性も見逃してはならない。ヒツジは品種によりその産子数にばらつきがあるが、伝統的牧畜社会あつては、多胎出産はそれほど多くはないようである。たとえば、アフリカ諸牧畜民の例によると、ヒツジの双子の出生率は約14パーセントほどにすぎない（Dahl & Hjort, 1976: 91）。また、モンゴル遊牧民においては約13パーセントであり、圧倒的に双子などの多胎出産が少ない。そればかりか、早熟性と同じく、双子出産が子嫌い現象を起こす誘因となるとして歓迎されていない（小長谷, 1996: 45）。

一方、湖羊はといえば、1980年の興興県のデータによると（表1）、その年に子ヒツジを産んだ成メス151,463頭の内、出産時1頭のみ産んだものは約17.35パーセントにすぎず、双子は約61.95パーセントにもほり、さらに3つ子が約17.61パーセント、4つ子が約3.03パーセント、5つ子が約0.06パーセントと、双子以上の多胎出産が、全体の約82パーセントをも占めている。この数字は牧畜民のデータと比べ格段に高い値だといえよう。ヒツジは一般的に、一腹産子数が多いものは生産する純毛量が低い傾向にあり、また、発育も劣るため、群れ増殖以外の面では個体として必ずしも有利ではない。しかし、湖羊飼育においては、利用しない純毛の生産量を勘案する必要はなく、発育に関しても出生時とともに屠殺するため考慮する必要はなく、多胎性は商品としての子ヒツジの高生産へ純粋に寄与するのみであるといえる。湖羊飼育が、商業経済と無縁ではあり得ないことは、収益が売買という商行為によって得られていることから明らかである。湖羊飼育の背景には商業システムが存在し、それとの関わりの中で湖羊の飼育技術は改良され、ヒツジ自体も改良されてきたと考えるべきである。

早熟性、通年繁殖性、多胎性といった湖羊の品種特性は、湖羊飼育が自給的な生業経済に位置づけられるのではなく、商業経済の中に高度に組み込まれてきたことを示しているのである。しかも、品種特性の改変は一朝一夕になされるものではなく、長期の継続的飼育によって初めてなされることからして、その商業経済の中に組み込まれた歴史はある程度長いタイムスパンをもって考えられるべきであろう。文字の国中国において、このヒツジについての文献記録が、12世紀中期以来残されている。それらを繙くと、湖羊という品種の成立が、この地の農業の商業化と軌を一にしていることは疑いない（詳しくは拙著「閉じこめられたヒツジたち」（『東京大学東洋文化研究所紀要』135）を参照あれ）。本来、山野を駆けめぐるヒツジを、ブタと同様の環境で飼育することに少々無理を感じるが、この嘉湖地方の人々にとっては社会環境、自然環境に適合した方法として受け止められ、かつ現実にこの方法で数百年もの長きにわたって湖羊飼育を持続してきた歴史的事実には注目せねばならない。

引用文献

G.Dahl & A.Hjort 1976. *Having Herds: Pastoral Herd Growth and Household Economy*, University of Stockholm.
 E.Hafez 1970. 『家畜家禽繁殖学』、養賢堂
 蔣兆光・何錫昌 1985. 『湖羊』、農業出版社
 小長谷有紀 1996. 『モンゴル草原の生活世界』、朝日新聞社
 松井健 1980. 『パシュトゥン遊牧民の牧畜生活』『京都大学人文科学研究所調査報告』33、京都大学人文科学研究所

変化し続けるジノ族の生産活動:

中国、雲南省でのフィールド調査から

阿部 卓
 学術振興会特別研究員

調査で数ヶ月ばかり村に滞在し再び昆明に戻ってくる

と、何かしら町の雰囲気が変わっているのに気づく。久しぶりにパンを食べようと、昆明 假日酒店へ行くことを思い立ち、昆明飯店の前の東風東路を渡ろうとすると、交差点にいつのまにか歩道橋ができています。以前は見知らぬ人の後にくっついて、川のように流れる自転車と自動車をよけながら路を渡っていたが、路を渡らずにこの歩道橋で越えるということらしい。自転車も通れる

第3回生態人類学会学術大会のお知らせ

日 時： 1998年3月22日(木)～23日(金)
12:30から受け付け、13:30から研究大会開始
研究大会終了予定は23日12:30

場 所： 〒377-01 群馬県北群馬郡伊香保町 横手館
Tel:0279-72-3244, Fax:0279-72-2008

大会参加費： 有給者：18000円、学生：12000円

大会事務局： 東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室
Fax: 03-5684-2739
梅崎 昌裕 E-mail: ume@humeco.m.u-tokyo.ac.jp
中澤 港 E-mail: minato@humeco.m.u-tokyo.ac.jp

1. 参加・演題発表の申込

1人あたり持ち時間60分(発表30分討論30分)の予定で演題を募集します。発表を希望される方は、同封してある返信用葉書の演題発表希望の欄に、タイトルを記入してください。抄録の原稿提出方法などを連絡いたします。旅館を予約する都合上、参加・演題発表の申し込みは1月15日までをお願いします。

2. 交通

上野駅から新幹線を利用した場合は高崎で下車し(上野-高崎:55分)、在来線で渋川駅へ(25分)、そこからバスに乗り換え伊香保温泉までは約30分です。高崎駅からもバスが出ていますが、便が少ないために渋川まで出た方が無難です。また、上野から在来線を利用して渋川駅まで行く場合は、新特急水上3号があり、上野発10:00で渋川着が11:46になります。ただし、学会開催時期までにダイヤが改正される可能性がありますので時刻表などで事前に確かめてください。

編集後記

- 早くも生態人類学会研究会のお知らせを出す季節になりました。開催を予定しています伊香保温泉「横手館」は、過去に将棋の棋聖戦が行われたことがあるそうでいい宿のはずです。また、朝まで飲み部屋に割り当てられる人がいなくなるようにできればと考えています。皆様の出欠の返事をお待ちしています(大塚・梅崎)。

ニューズレター 1997年12月10日発行

編集：大塚柳太郎・梅崎昌裕

版下作成：大崎 雅一

印刷：土倉事務所

生態人類学会事務局

三田市弥生が丘6丁目 〒669-13

兵庫県立人と自然の博物館生態研究部内

TEL:0795-59-2016 FAX:0795-59-2015

osaki@nat-museum.sanda.hyogo.jp